

#### 4 . あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。

Oupw mecrij aifatoj **antikatesthte** proj thn amartian antagwnizomenoiÅ  
 not yet untill **antikaqisthni** **kaqisthni** Pt.pr. : carry on a contest, struggle against, contend  
 (1) 他 place against; 立てる、任命する struggling against evil  
 (2) 自(2aor.) withstand, resist (HE 12.4). do everything possible against, fight against(HE12.4)

### 説教

ヘブル人への手紙では、「血」という言葉が始まる言葉が 2 1 回出てきます。

新約聖書全体では「血」という言葉が 9 7 回出てきますが、二番目に多い黙示録の 1 9 回を抜いて、最も多く出てきます。

今日の 1 2 章までの流れを概観すると、

ヘブル書の記者はまず、旧約時代の儀式にいけにえの血を流してイスラエルの人々の罪を贖った事実を事細かく記述します。

そして、身代わりのいけにえの血を流すことで人々の罪を贖う儀式は、

生けるまことの小羊として私たちの身代わりに十字架で死なれたイエスキリストさまによって成就したと言います。

「雄牛とやぎの血は、罪を除くことができない」(10:4)のに対し、

「キリストは、...大祭司として来られ、...やぎと子牛との血によってではなく、

ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。」(9:12)とあります。

さらには、

「イエスキリストのからだだけがただ一度捧げられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。」(10:10)ともあります。

それで、このイエスさまの流された血は、私たちの罪を贖って聖い者とするのみならず、私たちの心と行いをも洗い清めます。

神さまに逆らっていた私たちを、神さまに聞き従うものに変えてくれると言うのです。

次のようにある通りです。

「まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、

どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするのでしょうか。」(9:14)

「そのようなわけで、

私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、

からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。」(10:22)

そうして、さらに、信仰の先達たちのことを列挙しながら、

彼らがいかに天に望みを置いて生活し、そのために地上に於いては苦難を耐え忍んで生活していたかを説明します。

「また他の人たちは、

さらにすぐれたよみがえりを得るために、

釈放されることを願わないで拷問を受け」、

「あざけられ、むちで打たれ、

さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、

またのこぎりで引かれ、剣で切り殺され、  
羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、  
「荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。」(11:35-38)

ついでに、10章32～34節を見ると、  
当時の、手紙の著者が宛てた先の教会の状況についても記述がありますが、  
それによると、当時の教会は、大きな迫害に遭っていて、  
「苦難に会いながら激しい戦いに耐え」、公衆の面前で「そしりと苦しみを受けた者もあった」とあります。  
「自分の財産が没収された」ともあります。

そういう状況の中で、ヘブル書の記者は、どんなに大きな困難に見舞われても、自分の確信を投げ捨ててはならないと勧めます。  
「ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはなりません。  
それは大きな報いをもたらすからです。  
あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。」(12:35-36)

ヘブル書の記者は、  
信仰の先人たちが、イエスさまの血による贖いの恵みを受けて、自らの血をもって喜んで神の栄光をあらわして生きたように、  
私たちも、先人たちの足跡に倣って、地上に於けるあらゆる困難を耐え忍び、喜んで主のみこころを行って生きると言うのです。

アブラハムは、地上に何ら土地を相続しなかったけれども、喜んで自らが地上では旅人であり寄留者であることを告白しました。  
モーセは、はかない罪の楽しみを受けるより、むしろ喜んで神の民と共に苦しむことを選びました。  
また、他のある者は、釈放されることを願わないで、喜んで拷問を受けました。

ちょうどそのように、  
イエスさまが、喜んで十字架の辱めを受けて血を流されたように、  
旧約の聖徒たちが、喜んで迫害の苦難を受けて血を流したように、  
ちょうどそのように、  
旧約の聖徒たちのように、  
「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないで」、罪と戦えと勧めます。  
血を流すまで、罪と戦って抵抗せよと勧めるのです。

#### 4 . あなたがたはまだ、 罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。

「抵抗する」と訳される言葉は、「～に対抗して立つ、逆らう、抵抗する」といった意味があります。  
つまり、罪は、私たちが黙っていても、戦いを仕掛けてくるのです。  
右から左から、前から後ろから、私たちが罪の滅びと地獄へと押し流そうと押し寄せてくるのです。  
それに対して、罪の流れに流されないよう、流れに逆らって、立ち続けるのです。  
そして、さらには、流れに逆らって、一步一步前に前進して行くのです。  
その間、猛然たる罪の攻撃に遭います。  
頬を殴られ、蹴飛ばされ、刃物で刺され、飛び道具で打たれて、血を流します。

傷を負い、瀕死の状態となり、時にはいのちを落とします。  
そうやって、悪魔は私たちを全力で罪へと誘惑するのです。

それに対して、私たちは、どんな悪魔の攻撃に遭っても、それに怯んではなりません。  
「恐れ退いて」はなりません。

**「私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」** (10:39)

悪魔の攻撃を受けて立たねばなりません。

罪と格闘しなければなりません。

悪魔の攻撃を最後まで耐え忍んで、「血を流すまで抵抗し」なければなりません。

自分の確信を投げ捨てることなく、最後まで神さまの約束を信じて、主に従い抜かねばなりません。

いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競争を忍耐をもって走り続けなければなりません。

「最後まで主に従い行く」という「障害物競走」を、右往左往しながら、満身創痕の体で、最後まで、完走しなければなりません。

信仰は戦いです。

罪との戦いです。

しかも血を流すほどの戦いなのです。

ある人は、イエスさまを信じたら何も問題のない平穩無事な生活が待っているように誤解します。

でも、イエスさまの生涯はどうだったでしょうか。

決して何事もない平穩無事な生涯を生きられたわけではありません。

それどころか、イエスさまは、この地上にお生まれになった直後から地上の権力者にいのちを狙われました。

公生涯に入られて間もなく時の指導者・権力者たちからいのちを狙われ、最後は十字架に磔になって死なれたのです。

信仰の先人たちもそうです。

信仰にまじめに生きた人ほど大きな犠牲を払って生きました。

彼らは「罪と戦って、血を流すまで抵抗した」のでした。

私たちは、イエスさまを信じると、洗礼を受けるまで悪魔との戦いを経験しなければなりません。

そうして洗礼を受けるやもうそれ以降は何の戦いも無くなるように思いますが、

それは間違いで、洗礼を受けるともっと激しく大きな戦いに巻き込まれます。

そして、その戦いは一生、死ぬまで続いていくことになります。

でも、その戦いは意味のない戦いではありません。

その戦いは、まず私たち自身が天国に至るための、永遠のいのちを獲得するための戦いです。

そして、同時に、この地上に神の国をもたらすための戦いなのです。

クリスチャンとは戦う人です。

罪と戦う人です。

悪魔と戦う人です。

悪魔は神さまに背いて永遠の地獄行きを宣告されました。

それで、今は私たちキリスト者を道連れにしようとする最後の悪あがきをしているところです。

その猛烈な誘惑を完全に振り払って私たちは天国に入ります。

私たちはイエスさまを信じて完全に救われたけれども、未だ救いは完成していません。

私たちはイエスさまの血により罪を完全に贖われたけれども、未だ贖いは完成していません。

その意味で、私たちは完成の途上にある者です。

そして、救いの完成を目指して全力で罪と戦っているのです。

やるかやられるか、殺すか殺されるか、いのちを賭けて悪魔の惑わしに血を流して抵抗しなければなりません。

悪魔と格闘しなければなりません。

その意味で地上の教会は「戦う教会」です。

クリスチャンは何より「戦う人」でなければなりません。

ただ世の流れに迎合し、薄笑いを浮かべながら、

人と摩擦を起こさないよう、罪と妥協して生きる「お人好し」であってはなりません。

クリスチャン生活の基本は「ファイティング・スタイル」にあるということをしっかりと銘記しましょう。

ヘブル書の記者は、

**「あなたがたはまだ、**

**罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。」**と言いました。

この教会は、初期の頃、「苦難に会いながら、激しい戦い」を経験したことがあります。

人々のさらし者になって、「そしりと苦しみを受けた者」もありました。

「財産を没収」された人もありました。

でも、「罪と戦って、血を流すまで抵抗したこと」はなかったのです。

つまり、神さまを信じる信仰生活を送っていく上で、

迫害されたりいろいろと苦難を受けてはきたけれども、でも、まだまだなのです。

これまで大変な苦勞を重ねてきたけれども、でもまだほんの「序の口」に過ぎません。

旧約の聖徒たちの生き様に較べると、まだまだその列に加わるには全然足りない、半人前のヒヨッコに過ぎません。

私たちはどうでしょうか。

自分はもう十分に信仰の成長した者だと思われるでしょうか。

十分に主のために生きてきたと言える半生だったでしょうか。

自分のなしてきた業績に充分満足しきって、もうこれ以上やるべきことはないと考えておられるでしょうか？

今、主が御再臨なさって、あるいは私たちのいのちが取り去られて、私たちが主の前に立つ時、

「良くやった、良い忠実なしもべだ」とイエスさまに喜んでいただける生涯を歩んできたと言えるでしょうか。

イエスさまを信じた、イエスさまが十字架で罪を贖ってくださった、永遠のいのちをいただいた、それはすばらしいことです。

その恵みの故に、どんなに感謝しても、したりないほどです。

でも、その神さまの恵みに、私たちはどう応えたでしょうか。

どれだけ感謝し、御名をほめたたえたでしょうか。

どれだけ喜びと感謝をもって主に仕えたでしょうか。

どれだけイエスさまのお役に立ったでしょうか。

どれだけイエスさまの栄光をこの世にあらわしたでしょうか。

もう充分だと思っている私たちに対して、ヘブル書の記者はこう言います。

**「あなたがたはまだ、  
罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。」**

**「あなたがたはまだ、  
罪と戦って、血を流すまで抵抗したことがないじゃないか。」**

このみことばを肝に銘じ、血を流すほどの罪との死闘を展開していきたいと願います。

ここに集うみなさん一人一人が、

みなさんの内に外に、悪魔との死闘に打ち勝って、

キリストの証しをしっかりと打ち立てていかれるよう、主の御名によってご健闘を祈ります。